

## Somatometry of the Inhabitants in Wada-Mura, Nagano Prefecture

Makoto Suzuki, Makoto Kuriw  
and

Yasuji Nishizawa

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,  
Shinshu University  
(Director: Prof. M. Suzuki)

The authors carried out anthropometric investigations about 189 adult inhabitants (100 males and 89 females) in Wada-Mura, Nagano Prefecture, in May 1953.

The measurement values, indices and classification of indices of the population are shown in the tables.

The results are summarized as follows:

1) All measurement values excepting the breadth of hips in male are larger than in female. The indices of the relative length of upperlimbs and the relative breadth of shoulders in male are larger than in female and the index of relative breadth of hips and breadth-height index of head in female are larger than in male, but in other indices any significant difference between male and female can not be recognized.

2) In stature, they are a little short in both sexes (161.48 cm in male and 150.86 cm in female).

3) They are in both sexes brachycephalic (male 82.46 and female 81.63), hypsicephalic (male 66.97 and female 67.69) and metriocephalic (male 81.18 and female 83.15) in head and leptoprosopic (male 90.13 and female 91.26) in face.

## 癲癇特にその興奮に対するクロルプロマジンの使用経験

昭和30年12月13日 受付

信州大学医学部神経科 (主任 西丸四方教授)

関 守 関 俊 子  
二 木 哲 夫 中 田 明

精神々症及び精神病の患者の緊張状態、不安状態、亢奮等の精神運動亢進に対するクロルプロマジン(以下 Cp と記載)の少くとも対症的な効果については、現在これを疑う人は少いが、癲癇患者のそれについては我々が知る限りではまとまった報告としては、Vincent I. Bonafeda の最近に於けるものをあげることが出来るのみである。我々は彼の報告とは全く無関係に約半年前より若干名の癲癇患者にして而も Luminal や Aleviatin 等の従来の薬物では、その精神運動発作(錯乱、不機嫌状態等)を抑えることが出来なかつたような例に Cp を用いて相当な効果を認め、特にこれにより入院中の患者の取扱いを非常に容易ならしめる事が出来るとの自信を持つに至つたので報告する。

尙癲癇性の痙攣発作に対しては、今回はそれが主なる目的でないから多くはふれないが、従来の文献に照らし若干の検討を加えた。

### 症 例

我々の経験日数はまだ浅く、又実施例も少ないのであるが、こゝには比較的長期に亘つて観察し得た入院中の一部の例についてのみのべる。この外に目下投薬中であつて、予期したごとき効果をおさめつゝある例もあるが、使用日数も浅いのですべて除外した。

### 症例 1. 32才 女。

過去5年間に亘り Aleviatin, Luminal などの連続投与にも拘らず、常に易怒不機嫌で亢奮性強し時々他患と喧嘩をして室内に波瀾を起し看護婦達も其の処置に手を焼いていた。始め従来使用していた Aleviatin, Luminal を中止し Cp に代えたところ、従来認められなかつた痙攣発作が頻発し始めたが、亢奮易怒は和いたので両者の合併に代えたところ痙攣もなく精神症状もおさまり、そんな状態が20日間も続き間もなく再び自然に精神運動不安を認めたので Cp を増量したら再び安静に戻つた。前後68日間投薬したが、最近になり一時 Cp を中止してみたところ矢張り投与前と同様な症状が現れ始めたので現在は又服薬を実施中で精神症状もおちついている。

### 症例 2. 34才 女。

15年来の癲癇患者で長期間に亘り Barbiturate 系の癲癇剤を継続していたものである。易怒不機嫌で独語あり、ときどき亢奮して他人と争い徘徊や蒐集癖があり、それを制止すれば怒号し反抗する。痴呆状態も強く判断力、指南力は著明に低下している。症例 1 と同様従来から用いていた薬剤を Cp に代えたところ大発作が頻発するので両者の併用を開始したが、この場合大発作のみは消失したが亢奮性や徘徊独語等は殆んど

影響されず、前後70日間に亘り全量 11.387mg を用いている。

#### 症例 3. 24才 女。

2年程前に精神分裂病の診断で入院したが、時々支離滅裂な言動や爆笑、徘徊などが見られ、特に昨年6月頃から癲癇性大発作が認められたので、そのために Aleviatin, Luminal の連続投与を行っていた患者である。ときに無為茫然、空笑、独語などが見られていた。亢奮易怒不機嫌なども時々現れる。Cp を前記の薬剤と併用し70日間に及んだが殆んど精神症状は変わらない。癲癇は症候性のものである。

#### 症例 4. 25才 女。

3才の頃から大発作の見られた患者で、昨秋頃から不機嫌、亢奮、迂遠、不眠、器物破損、怒号などが認められたので入院した Luminal と Cp を併用したところ、従順温和となり殆んど興奮は見られなくなつた。投薬の継続中大発作が2度認められたが、Cp を併用せず Luminal のみを用いていた当時も時に大発作が見られたのであるから Cp の大発作に及ぼす影響は明らかではない。

#### 症例 5. 20才 男。

11才の頃から痙攣発作を認めたが最近発作が頻発するために入院し、鎮痙剤を使用したところ痙攣は一応おさまつたが、常に不機嫌で不平や不満をもらし、理屈よく迂遠、執拗で反抗的である。Cp を併用以来上記症状は次第に消失し協調的で喜々として作業治療などを受けるようになった。

#### 症例 6. 30才 男。

10年来の癲癇で痙攣発作は鎮痙剤で抑えられていたが、屢々衝動行為、拒絶症、自傷他傷などの乱暴に加うるに執拗、粘着性で看護人に文句を云つたり、拒食などが見られ看護上手を焼いていた患者である。Cp により漸次従順となり、衝動行為や乱暴はなくなり経過良好であつたので、一時服薬を中止せしめたところ、再び症状は悪化して来たので再投与を開始し現在も尚服薬中である。薬量の増量により一時症状は改善されるが、同量をしばらく継続すると再び悪化の徴が見える。

#### 症例 7. 37才 男。

30余年来の患者で入院以来 Aleviatin や Luminal の投与にも拘らず強い亢奮や衝動行為、支離滅裂、怒号等譫妄状態が続き保護室の便所の中をかき廻し、室内を汚物でよごし、衣類を引き裂き殆んど摂食もせず、不眠で為に全身衰弱を来し一時危険を予想した程である。Cp 開始当時は飲食物に薬を混入して服用させていたが、治療が進むと共に安静となり、意識も清明で進んで治療を受け、極めて従順で、逐次薬量を減少し、投薬中止后1ヶ月間は何等の異常を認めず退院し

た。

#### 症例 8. 37才 男。

17年前より癲癇に罹患している。最近大発作の重積があり、其の後亢奮、反抗などがあり入院した。Luminal と Cp の併用が行われ、漸次安静となり殆んど正常に戻っていたが、1ヶ月位して再び悪化の徴候が見られたので Cp を増量したところ現在まで経過は極めて良好である。退院後は投薬していない。

#### 症例 9. 23才 男。

6年前癲癇を発病、無為、無口、好褥で時に徘徊放歌が見られる。性格は陰険で執拗、理窟つぽく排他的である。併用療法を実施したところ放歌徘徊などは幾分は減少したが、全般的的印象は治療前と大差なく、薬物は増量しても減少しても症状の変化は認められない。

#### 症例 10. 12才 男。

4才の頃から癲癇があり、入院当時は既に知能の低下も相当に認められた。Aleviatin, Luminal を服用せしめたが、相変わらず亢奮、易怒、不機嫌などは去らず、短気で看護人に噛みつき、物を投げつけ、言語も乱暴で泣き叫び、のゝしるなど子供とは云え看護に手を焼いたのであるが、機嫌をとりつゝ Cp を合併してゆくうちに安静温和となり服薬を自ら要求し親しみ易く時に笑顔さえ見られるようになった。減量しても以前の症状は現れない。目下尚投薬中である。

#### 症例 11. 11才 男。

3才の発病である。入院以来 Barbiturate 系の癲癇剤と併せて、肺結核の化学療法を実施していたが、不機嫌で乱暴で他人の言うことを聞き入れない。Cp の併用により次第に暴直になり約60日後には亢奮乱暴は見られず、肺結核の経過も良く退院した。入院期間は60日である。

#### 文献的考察値に考案

W. Winkelmann は6例の各種癲癇に Cp を試み、2例について著効を認めているが、小発作性のものには全然無効であつたと報じている。Gäde は2例の患者のもうろう状態に無効であつたとするに反し、Lafon, Duc, Vidal 及び Minvielle は従来の抗癲癇剤と併用して意識障害の軽快を見たという。Benafede は同様に急性及び慢性の癲癇性精神症状に著明な効果があることを認めている。

国内では田原等は2例の経験中1例に於ては著効を認め、他の1例についても症状の改善を認めた。松岡等は真性癲癇の男女夫々1例に用い、痙攣発作そのものには直接影響は見られなかつたが、蒐集癖、刺戟性等の不愉快な性格はある程度軽減し、病舎に於ける扱いが相当容易になつた事は事実であるとのべている。沢等は当初分裂病と思われた癲癇の1例に Cp を使用

し症状は著しく改善され、自発性も増加し、接触性も良くなり、同時に脳波の所見も余程改善された例を報告している。松谷は外傷性癲癇の亢奮を Aleviatin と Cp で洗静せしめた例と、分裂病に癲癇を合併する例で、Cp を用いたところ分裂病の症状（自閉的寡黙、発起性欠如、無表情、妄想気分、関係妄想、作為現象、思考遮断）が消えた例とを報告した。蔵原等は精神運動性発作を抑えることが出来た1例を報告している。

以上の如く従来の報告によれば、多かれ少なかれ精神発作に対し良効をおさめたとする例が多いが、我々の場合も又それを裏書するような例が多かつた。全般として病室内での取扱いは極めて容易となり、反抗的な態度は消え従順となり、執拗、理窟つばさは減じ、昼夜を問わず騒ぎ続けた患者や乱暴を働き続けた患者が平穩に毎日を送るのみか、室内での態度は協動的で而も自発性に富むなど、諸家の説と一致した結論を得たのである。

然しながら本剤が癲癇に本質的な効果を有するか否かは又別の問題である。我々の第1例及び第6例に於て意識的に一時投薬を中止した例では、中止後間もなく精神症状が再燃し、再投与により再び症状の消失する事実が認められ、又第1例、第6例及び第8例では投薬中にも拘らず症状が再び悪化する徴候の見られたとき、本剤を増量することにより症状が再び停止したなどの事実は少なくとも本剤の有効性を証明するものではあるが、反面第2、3、9例に見られるごとく殆んど無効例のあることより本剤が癲癇に対し特効的又は本質的な作用を有するとは思われない。

使用量使用期間についても問題があり、Cpの服用を中止しても症状の悪化しないもの（第7、8例）、減量しても悪化しないもの（第3例）、投薬中止により直ちに症状の悪化するもの（第1、6例）、逐次増量しないと悪化の徴の見られるもの（第6、8例如）、何なる投与量にも反応しないもの（第2、3、9例）などがあり、又同一例で作用の様式が時期により異なるもの（第6、8例）などもあり、如何なる量を如何なる期間与えるべきかは今後の重要な問題であろう。

次に本剤の痙攣に対する効果については、Gäde等は鼠を用いた動物実験で Cp を予め投与して置くと、電撃で引起さるべき強直性の痙攣を予防しようというし、小児科医達（Sorel, Bardier, Rieunav, Auban und Dalous, Janssen und Wilms, Janbon und Mitarbeiter）によると小児中毒症、脳脊髄膜炎、脳膜炎等に際しての痙攣発作には良好な効果があるという。David, Benda 及び Klein 等は Cp 単独で、或は Novocain 又は Pentothal との共用により痙攣に対する効果を認めているものゝ、Bonafede は寧ろ悲観的な結論であるし、Lomas 等は Cp の服用により癲癇を誘

発した例を報告している。Röttgen は David 等の効果ありとする報告に対し、自律神経の遮断のみで有効なのか或は冷却を伴わない遮断のみでは無効なのか寧ろ後者の場合に賛意を表しているごとくである。

我々の例では第1例2例4例に Cp 投与中痙攣発作を、特に第1第2例では重積状態を見たのであるが、第1、2例は従来用いていた Luminal 等の沈痙剤を中止して Cp に代えた場合の出来事であり、第4例は Luminal 等を用いていた当時より、時に発作を認めていた患者であるから、Cp の痙攣に及ぼす作用についてまだ何とも云えない。又前記 Lomas の例もかつて脳の Lobotomie を実施したことのある患者であるから痙攣の誘発が Cp により行なわれたものであるか否かは不明である。

最後に松岡等は癲癇の性格変遷、精神病質者の異常性格の矯正にも有効ではないかと考えると云つてはいるが、我々の第2、3、9例に於ける経験よりすれば寧ろ悲観的である。然しながら Cp により対症的に患者の症状を変え、患者の取扱上又は臨床的な必要性から Cp を用いるというならば我々も賛成である。

#### 結 論

- 1) 癲癇患者の精神発作に Cp は極めて有効に作用する。慢性化した人格変化に対しても少くとも看護上又は取扱上幾分の利点があるらしい。
- 2) 現在のところ Cp は癲癇を本質的に治癒せしめる特効薬とは思われない。
- 3) 投与量と投与の期間とは個々の症例により加減すべく、今後も尙研究の余地がある。
- 4) Cp の鎮痙作用についても今後の研究が必要である。

（西丸教授の御指導御校閲を感謝し、本研究に種々なる便宜を与えて下さつた城西病院長関忠英博士に感謝する。本論文の要旨は昭和30年11月6日長野県中医学会に於て発表した。）

本研究に使用した薬物は吉富・塩野義両製薬会社提供のものである。併せて感謝する。

#### 文 献

- ①N. William Winkelmann: J. A. M. A. Vol. 18, No. 6, 1955' 日本版別冊,
- ②Vincent I. Bonafede: A. M. A. Archives Neur, Vol. 74, Nr. 2, 1955, p. 158.
- ③E. B. Gäde u. K. Heinrich: Fortschritte Neur. 23 Jg. Heft 8, 1955, p. 323.
- ④沢外: 新薬と臨床, 第4巻第11号, 昭和30年11月.
- ⑤コントミン文献集, 第1輯, 精神々経科領域, 昭和30年.
- ⑥ウインタミン臨床文献集, 第Ⅱ集, 昭和30年.

# Chlorpromazine Treatment of Epileptic Patients, especially of Epileptic Excitement

Mamoru Seki, Toshiko Seki  
Tetsuo Futatsugi, Akira Nakata  
Department of Neurology, Faculty of Medicine,  
Shinshu University  
(Director: Prof. S. Nishimaru)

Although the period of observation is admittedly quite short, the results so far observed indicate the following conclusions:

- 1) Chlorpromazine is highly effective and dramatic in controlling epileptic excitement and behavior disturbances.
- 2) Chlorpromazine is not a specific medicine for epilepsy. It has an influence only upon clinical psychic symptoms.
- 3) The dosage and the period of medication may be variable among individuals. And the standard methods of therapy have to be studied.
- 4) The alleviating effect upon seizure frequency by the drug is not clear.

## 過去10ヶ年間に於ける腎結核手術成績

昭和30年12月17日 受付

長野赤十字病院皮膚泌尿器科  
部長 奥井重敬  
副部長 増田圭喜  
医員 児玉和志  
長野市古里診療所  
米沢敬吾

### 緒言

腎臓結核は化学療法の発達した現在に於ても、その治療法は手術に依る以外なく、最近部分切除術が行われる様になつたが之も手術というに変わりがないのであつて、たゞ化学療法のそれが腎結核患者の手術適応を拡大したり或は、その予後を良好にするに過ぎず、今後もこの手術という時代は当分避け難いであろうと思ふ。

我々は本誌2巻1号に昭和20年月より、昭和24年7月に至る間に手術を施行した腎結核100例に就て主としてその予後に関して報告したが、その続報という意味で過去10ヶ年、即ち昭和20年8月より昭和30年7月に至る間に別出した腎結核患者279例の手術成績について若干統計的観察を試み、更に前回報告分と比較検討考察を加えて見たいと思ふ。

之等患者の予後はその判定明らかなる者を除き、すべて往復文書により問合せたものであつて、住所異動その他による不明6例を除きすべて予後の判定をなし得た。併し乍らその遠隔成績は最近3ヶ年の者は満3年を経っていないので、一応全別出例の統計を掲げ次で遠隔成績に関して述べることにする。

### A 過去10ヶ年に於ける腎結核手術成績(279例)

(1) 年度別別出術数 (第1表)

之は昭和20年、並に30年は約半ヶ年の数であるために之を除き、最高は29年の39例、最低は21年の19例であり、年平均は29例となつている。

### (2) 性別・年令別・罹患側別 (第2表)

性別では155:124で男性がやゝ多いが之を以て腎結核が男性に多いと既断するわけには行かない。年令的には諸家の統計が示す如く21~30才代が最も多く、

第1表 年度別別出術数

年度	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
例数	3	19	35	28	25	26	23	33	32	39	16	279

第2表 性別・年令別・並に罹患側別

年令	性		罹患側		計		総計
	男	女	右	左	右	左	
10才以下	1	0	0	0	1	0	1
11 ~ 20	5	10	7	6	12	16	28
21 ~ 30	36	30	26	23	62	53	115
31 ~ 40	30	22	15	20	45	42	87
41 ~ 50	8	5	7	10	15	15	30
51 ~ 60	4	4	6	3	10	7	17
61才以上	0	0	0	1	0	1	1
小計	84	71	61	63	145	134	279
総計	155		124		279		